

魔を言わず

菅原伸郎

善	南
財	無

カルト被害者の救済活動を続ける福岡在住の弁護士、大神^{おおが}周一さんから手紙をいただいた。昨春秋に開かれた全国霊感商法対策弁護士連絡会の集会で発表し、十二月号と一月号の本欄でも報告した私見について、いくつか疑問を呈している。

私の発言は「宗教の本来は神仏に気づくこと、感動することにある。外にある何かを対象的に信じることは迷信や狂信につながる」といった趣旨である。怪しい宗教を見分ける一つの尺度にならないか、という問題提起のつもりだった。

大神弁護士はこれに対して、カル

ト教団が信徒に過酷な修行を強いる例を挙げ、気づくことや感動することも過大に評価してはならない、と警告する。たとえば、某教団は炎天下で意識がもうろうとなるまで働かせ、その末に「メシアの声が聞こえた。神の存在に気づいた。信仰が深まった」などと感動させるように仕向けるそうだ。

伝統宗教にも、自虐的ともいえる難行苦行で判断力を失わせる修行がある。布教活動や選挙運動に奉仕させ、多額の金品を献納してこそ真の

信仰だ、と教える団体もある。そうになると、古い宗教も新しい宗教も理性を捨てさせる点では大差がないことになってしまふ。

その危うさはあるのだが、といって、すべての宗教が理性を否定しているわけでもない。たとえば、仏教には「無分別の分別」という言葉があり、超えたとしても、分別は捨てるべきではないのだ。道元も「(坐禅にあつては) 目は見開きすぎても、つむりすぎてもいけない」(正法眼蔵・坐禅儀)と論している。

大神さんは「気づくことと信じることはどう違うのか」ともいう。当然の問いであり、改めて考えてみたが、やはり、そこに「外なる対象」があるかどうか、能動か受動か、と

いう答えに戻ってしまった。目に見える光景であれ、メシアの声にせよ、あるいは形ないものにせよ、自分の外や向こうにあるモノを超越的実体として考え、こちらから拝むことは判断の停止であり、呪術や天魔に迷い込む隙が生まれる。

キリスト教徒をはじめ、多くの信者は「天にまします我が父よ」などと祈っているが、私にはいずれも古代的な信仰としか見えない。それなら、神は雲の上にかおられないのか、この地上や我が心にはどうなのか、と尋ねたくなる。そうではなく、本当の宗教的感動は「対象」抜きでしか表現できないのであり、それは「気づく」という絶対受動の形になるはずである。

こうした覚醒型の信仰は、キリスト教でも中世神秘主義やクエーカーのなかにも見られるし、そもそも、イエス自身もそうした方ではなかったか、と私にはらんでいる。

こんなことを書くと、今度は「浄土系仏教では西に向かつて阿弥陀仏を拜んでいるではないか」という反論があるだろう。しかし、仏教には「方便」という教化方法があるのであって、阿弥陀仏も大日如来も観音菩薩も実体としてのカミではない。

あくまで衆生に語るための手段にすぎないわけで、道元禅師も《方便門は仏果の無上功德なり》（正法眼藏・諸法実相）と認めている。

親鸞の場合は《今、浄土の諸経に並びに（いずれも）魔を言わず。すなわち知りぬ、この法に魔なきこと明らかし》（教行信証・行巻）と書いている。「無限」のシンボルとして阿弥陀仏を措定してさえおけば、その他の天神地祇や魍魎魍魎をおそれたり、悟ってはみたものの元の木阿弥となつて魔界に逆戻りしたりすることもなくなる、というのだ。

こんな文章を読みつつ、私は、この方便の思想をカルト対策に応用できないか、などと考えている……。

（東京医療保健大学教授）

